

秋田県立博物館分館・奈良家(秋田市金足)



久しぶりに県立博物館を訪ねてみた。開設から五十年ほど過ぎたこの施設は、外観から受ける単調な印象も加わって、期待しての入館とはいえなかった。一階の自然展示室から入って二階に上がり、人文展示室と「秋田の縄文遺産」を巡ったが、無料なのに入館者の姿が足りないのだ。企画展「秋田の縄文遺産」は、予算が足りないのか、展示意欲の問題なのか、夏に三内丸山遺跡を見学したばかりの私たちには、関心が向けられず通り過ぎてしまった。

人口減少をテーマに若者への対応を取り上げた新聞に、「寛容性要る」と見出しがあった。寛容とは、「寛大で、人を受け入れること」と辞書に書かれているが、県立博物館

の学芸員から、寛容性の無い苦々しい対応をされた記憶がある。

旧奈良家は茅葺民家を撮り続ける過程で、大切な被写体のひとつであった。三十年前の春、撮影したいと博物館に連絡したが、「許可できない」と言われ困惑するしかなかった。「勝手に撮影して、金もうけをしている事例がある」との理由であった。

県内の茅葺民家を撮影して十年が過ぎ、範囲を東北に広げようと思案している時期でもあった。学芸員に撮影の意図、写真集にまとめる予定などを説明して、後日、博物館に行つて「資料特別利用許可書」をもらう手続きをした。

困惑と立腹せざるを得なかったのは、その

頃、旧奈良邸の茅葺屋根の葺き替え工事があり、がらりと意匠が変わったことだ。工事をしたのが津軽の職人だったとしても、材料の茅が岩木川のヨシになり、直線的で固い津軽の屋根に仕上がったのだ。その背景を、県民へ説明する配慮もなく、「土地の材料と技術と意匠で」という民工芸の原則を、民俗部門を担当する学芸員が知らないとは思えなかった。

写真集「茅の家」で対談した日本茅葺文化協会・代表理事の安藤邦廣さんは講演で、「民家は風景であり、社会である」と語っていたが、博物館の対応と管理運営も然りなのだ。県立博物館は寛容性を持つて県民に対応しているのか。開設から半世紀が過ぎて、これからも問われていく。